



帰還兵は地獄を見た

大貫健一郎

元陸軍少尉

渡辺 考

NHKディレクター

朝日文庫

序章 幽閉された軍神…………… 3

第一章 「特殊任務を熱望する」…………… 19

特別操縦見習士官……………	21
大刀洗から北支、そして明野へ……………	25
少数精鋭の訓練所……………	37
敵を殲滅する新任務……………	39
フィリピンに散った仲間たち……………	44

〈解説〉

太平洋戦争と特攻作戦……………	50
-----------------	----

陸軍は大陸、海軍は太平洋／絶対国防圏の危機／マリアナの七面鳥撃ち／跳飛爆撃／台湾沖航空戦／神風特別攻撃隊

／「万朵隊」と「富嶽隊」／学徒パイロットたちの「大戦果」／フィリピン戦線からの敗退

第二章 第二三振武隊…………… 93

黒マフラーの飛行隊……………	95
任務は本土防衛……………	104
初めて気づいた特攻の困難……………	106
知覧へ……………	111

〈解説〉

沖縄戦前夜……………	118
------------	-----

驚愕の「ウルトラ文書」／張り巡らされたレーダー網／駆逐艦ラッフェイ号／六〇冊の「菅原軍司令官日記」／「天号作戦」と「決号作戦」／沖縄戦準備の混乱／焦燥の菅原中将

第三章 知覧……………155

菅原中將との再会……………157

エンジントラブル……………163

仲間たちの出撃……………166

夢か現実か……………172

「困難を排し突入するのみ」……………178

〈解説〉

陸海軍の不協和音……………185

アメリカ軍の沖縄上陸／海軍主導の特攻作戦

第四章 友は死に、自らは生き残った……………193

再出撃……………195

グラマン機との遭遇……………198

徳之島での再会……………203

喜界島の困窮生活……………210

内地への生還……………217

〈解説〉

陸軍第六航空軍司令官の絶望……………222

菅原中將の嘆き／義烈空挺隊

第五章 振武寮……………229

「死んだ仲間に恥ずかしくないのか」……………231

台中に届いた戦死公報……………237

倉澤参謀への反発……………241

本土決戦の特攻要員……………246

〈解説〉	
軍神たちの運命……………	252

靖部隊編成表／倉澤参謀最後の証言／語られた「振武寮」
の実態／沖繩決戦から本土防衛へ

第六章 敗戦、そして慰霊の旅…………… 267

孤野陸軍飛行基地……………	269
八月一日……………	271
新橋マーケットの「用心棒」……………	276
母の死から始まった私の戦後……………	280
「特操」期生会名簿……………	285
仲間たちの墓参……………	289
なぜ俺だけが……………	303

〈解説〉

上官たちの戦後……………	308
--------------	-----

「父は自決すべきでした」／いつも拳銃を携行していた倉澤
参謀

終章 知覧再訪…………… 323

あとがきにかえて……………	335
文庫版あとがき……………	340
主要参考文献……………	346
謝 辞……………	350
解説 鴻上尚史……………	352

鹿兒島市内に向かう車の中でしっかりとこちらを見すえながら大貫さんは言いきった。特攻作戦から幾多の年が重なった。それでも大貫健一郎さんの心の中で、特攻という許しがたい作戦への怒りの炎は、強く燃えつづけていた。

〈渡辺考〉

あとがきにかえて

渡辺 考

透明のガラスの向こうのDJブース席に、私がこれから面会する女性が座っている。
大貫妙子さん。

一九七三年のデビューから今日に至るまで、日本のポップミュージック・シーンを牽引してきたミュージシャンである。透き通ったメロディーと心に染みる歌詞を聞いていると、すがすがしい気持ちになるのは私ひとりではないだろう。近年は音楽活動に加えて、エッセーの執筆など表現の幅を広げている。

この日は、NHKのFM番組の収録日で、私は番組収録後に妙子さんにインタビューをするようになっていた。

私は妙子さんのファンのひとりではあるが、音楽の話をするつもりはなかった。聞きたいことはひとつ、妙子さんの父親についてである。

父の名前は、大貫健一郎。

ブースから出てきて、ひといきつくと、妙子さんは語り始めた。

「父が特攻隊員だったと知ったのがいつごろだったか、さだかではありませんが、そのことにショックを受けたという記憶はありません。ただ、特攻隊が爆弾を抱えて突っこんでいく人たちだということは、子どもだった私にもわかっていました」

しかし一〇代の終わりからミュージシャンとして脚光を浴び始めた妙子さんには、父親の過去と向き合う心の余裕などなく、ただひたすら音楽の世界に没頭していたという。父は父で、現実の生活に忙殺され、会話をする時間もなかった。

二〇年ほど前に父と同居するようになり、はたと気づかされたことがあった。

「父の本棚をはじめてちゃんと見たとき、そこが戦争の本で埋め尽くされていることでも思い知らされました。父にとって戦争の記憶は、生涯ぬぐい去ることのできないものなんです。父は戦記雑誌やさまざまな会報誌に執筆していますが、理不尽な死を選択せざるをえなかった特攻とあの戦争の意味を、ずっと探し続けているのかもしれない」

それでも同居からしばらくの間は、特攻そのものについて父の口から語られることはなかった。

「特攻隊で生き残ったことに対して、表立ってよかったと口にする人は、誰もいないと思います。死ぬことが与えられた任務だったからです。そのことに対する思いは、身内だからといって聞くことはできませんでしたし、聞かずともわかることでした。夢も希望も未来もある二〇歳そこそこの若者にとって、特攻が受け入れがたい任務だったこと

は明らかですし、父の思いは、想像するだけでも胸がギリギリと痛みました。

特攻という任務で結ばれた絆は強かった。その仲間がづぎつぎと目の前で死んでいく。父は出撃し生き残りましたが、あのととき、父の人生は終わったんだと思います。戦後は、父の長い長い余生なんです。きつと」

それでも父は、振武寮（おとこやう）の存在について、娘に語ったことがあった。

「生き残ったものの、またさらなる苦しみが続いていた。その屈辱は容易に忘れることができないでしょう。父は、生き残ってよかったと思うときも、死んだほうがよかったと思ったこともあったと思います」

妙子さんは、近年になって、父の存在の意味をかみしめている。

「子どもにとって父親の過去は関係ありません。父がいなければ私はここに存在していない。父は大きな存在で、生き残ってくれてありがとうという、感謝の気持ち以外ありません」

妙子さんは、死んだ仲間の思いを背負った父を励まし続けてきた。

「戦後六〇年あまりを経て、特攻隊の真実を語ることができる人が少なくなるなか、父が常に危惧（きぐ）してきたことは、ともすると特攻隊が美化されて伝えられていることでした。私は父に『生き残ったお父さんのお役目は、真実を伝えることなんじゃないですか。それが亡くなった戦友への供養になると思うし、無念の思いを抱いて逝（はな）ったみんなのため

だと思ふ。みんなが背中を押してくれていますよ。世間の声なんか気にせず、思い残すことなくありのままを語ったほうがいい」と折に触れ言っていました」

そんな妙子さんの思いを聞いた私は、父の戦争体験が娘の音楽に与えた影響について尋ねてみた。しかし、「それはありません」と言われてしまった。

「父のDNAは受け継いでいますが、戦争体験は受け継いでいないので。それは体験した人にしかわからないでしょう。ただ、多くの命の犠牲のうえにいまの平和があることを忘れてはならないという、強い気持ちは持ち続けてきました。多くを語らない父ですが、父の世代が生きている限り、戦争の後始末は終わらないではありませんか」

妙子さんは続けた。

「音楽で世界が平和になるとは思っていないし、そんな甘いものではないとわかっています。でも、音楽は時代を映す鏡だと思ふし、過去においてもすべての芸術がそうだったように、音楽家には表現することへの自由が与えられています。マスという顔の見えないところに向かって歌うのではなく、身近な人へのメッセージこそが、まっすぐに届く言葉であり共感へと結びついていくはずですよ。そういう姿勢は、これからも貫いていきたいですね」

父とはちがう道を歩んできた娘。平和を希求する心は、ちがう形で父親から娘にバトナタッチされているのだと思つた。

インタビュを終えた妙子さんは、足早に夕闇ゆやみが覆う渋谷の街にとけ込んでいく。私の脳裏には、軽やかで伸びのある妙子さんの歌声が響いていた。